

## IV 道徳 3年次の成果と課題

### 1 成果

#### (1) 多様な道徳的価値に触れることで生まれる自分の道徳的価値観の変容

一つの葛藤場面に多様な道徳的価値が内包されていることを知ることは、心の引き出しを増やしていくことに通じていく。それは、相手の気持ちに寄り添う思考になったり、自身の生き方の幅を広げしなやかにしたりする。

「誠実であること～手品師～」の実践では、「軽い気持ちでした約束だったのに、手品師はなぜ迷ったのか」という学習問題に対して、手品師の心の中を可能性のある限り出す場をとった。その際留意したことは次の三つである。

- ① 自分の気持ちがどうかではなく、状況から「あえて」考え、可能性を探る。
- ② 「大劇場に行くこと」と「男の子との約束を守ること」それぞれのメリット・デメリットを分担し考える。
- ③ 互いに情報交換し、「相手の考えで自分が一番盲点だった考え」を全体で共有し合う。

メリット・デメリットという視点での思考は、両者の状況が表裏になっていることに気付く場となる。さらに③の視点は、「どんな気持ちだったのだろうか」と問い続ける心情理解に留まることからの脱却になることや短時間で意外性を取り上げることにつながり、道徳的価値の多様性に広がりとも深まりをもたらす。多様な道徳的価値に触れた子どもたちは、自分自身が思ってもいなかった道徳的価値と向き合わざるを得ない状況となる。「どれもあり得る」「理由は一つではない」といった思考は、「これらの中でどれを優先させたのだろう」と移っていく。教材の中の人物がどんな思いで決断に至ったのか。心の優位性について議論する場が、自分の道徳的価値観と真っ向から向き合う場となっていく。なぜその道徳的価値を選択するのか、なぜ他の道徳的価値は選択しないのかを語り合う過程に自分の道徳的価値観が形づくられていった。

多様な道徳的価値に触れることは、心の経験を広げる窓口となり、自己の生き方を見つめ直すきっかけとなる。教材の人物の姿を借りて語る子どもの姿から、人が生きていく根っこが、よりよく生きたいという前向きな原動力をもつ人への信頼に支えられていることを感じる。

#### (2) 協働的な学びを支える自分事としての思考

道徳の授業全てに省察の場が存在する。しかし、どの場面で心が大きく揺さぶられるのかは、自分の心と対峙するその子ども自身に委ねられる。

これまで、導入にその時間に主となる道徳的価値に沿ったアンケート結果を紹介してきた。そこには、友達を感じ方と自分の感じ方の相違を目の当たりにすることによって、その時間のテーマ性を感じ取る子どもの姿があった。終末の際にアンケート結果から感じたことをもとに自分の見方・考え方に直視した子どもの言葉からは、自分事としてこれからの自分を見つめる姿を感じた。

「葛藤のトンネル」を用いた場面では、友達からの「心の声」を浴びながら「葛藤のトンネル」を歩くその姿が、教材に登場する人物の姿を借りて本気で悩む自分の姿そのものとなっていた。「誠実であること～手品師～」の実践では、手品師の決断が書き記されていたものの、その決断を頭の片隅に置きつつ手品師の葛藤が自分自身の葛藤となっていた。そして、周囲の子ども自身も「心の声」を発しながらも自分だったらどう決断するだろうか思考し「心の声」を言葉にしていた。葛藤する友達を前にしたリアルが更に自分の思考をアクティブにしていった。

### 2 課題 自分の納得した道徳的価値観を導く議論の在り方

多様な道徳的価値に触れ、そこから道徳的価値の優位性を探っていく段階に自然と議論が持ち上がる。しかし、決断の背景を優位性のランキングとして小グループで議論することによって、一人一人の思考の違いを生かし切れなかったことが課題となった。それぞれ自分の考えを持ち寄りながら互いの道徳的価値観をときどきぶつけ合い、ときに受け入れ、試行錯誤しながら新たな道徳的価値観に結び付いていく。その議論の場に自分の思考が再構築されていくよさが見えるが故、協働的な学びのスタイルをとりつつ一人一人の判断に委ねる方法を探っていきたい。